

「天国までの49日間」を読んで

東広島市立高屋中学校

第1学年 富原 理生

日 天国までの49日間[□] を読んで
 東広島市高屋中学校 一年 富原 理生

「自殺は自分を殺すって書くけれど、殺されるのはその人だけじゃない。周りの人にだって、死にたいくらいの思いをさせてしまう。これは、十四歳の安音が、自殺をしてから初めて家族のありがたみに気付き、思ったことです。私は本を読み終わって一番この言葉が心に残りました。

中学校専用原稿用紙

私が小学五年生だったころ、いつも元気でとてもやさしかったクラスメイトが七くなりました。七くなつた原因は事故でした。私はその日に生まれて初めてあたりまえがあたりまえではなくなる日があるのだということを知りました。そして、それから毎日、いつも空っぽだった給食缶が残飯でいっぱいになり、みんなの目もいつも腫れていました。そして、防ぎやうのない事故だったけれどみんな、あの時、こうしていれば……。

と、自分を責めていました。

事故はどうにもならなくても、自殺は止めることができません。もし、自殺をしてしまつたら周りの人達は、

「なぜ何もできなかつたのだらうか。」

と事故の時以上に自分を責めて、何倍も苦しむのだらうと思ひました。大切な人に大切だと言えないまま会うことができなくなつてしまふのは、とてもつらい事です。それを知つてゐるからこそ、自分の想いを言葉にしてくれた安音の気持ちに心染み、残つたのだと思ひます。

中学校専用原稿用紙

近年、自殺が増えていると聞いたことがありません。理由は、いろいろあると思ひけれどこの同じ地球に住む人で、まだ数年しか生きていないのに戦争によつてなくなつてしまふ命や、未来に夢や希望を持つてゐるのに病気で死んでしまふ命だつてある。それなのに、まだまだずつと生きていくことのできる命を自分から消すのは、おかしい。ぜつたいにし

てはいけな事だと私は思います。

でも、この本の安音がクラスメイトからど

のようないじめを受けていたかを読んで、私

は自分の心臓の動きが速くなるのを感じまし

た。ずつと大切にしていた編いぐるみを踏ま

れたり、トイシの床を舐めさせられたり、服

を脱がされたり。本を読むのが怖くなりました

た。今まで、いじめはいけないと思っていた

けれど私が想像していたいじめよりも、ずつ

とずつとひどいものでした。大人も子供もい

中学校専用原稿用紙

じめを知らない人は簡単に、

いじめは、ダメ。

と言っているけれど、簡単にいじめるとい

う言葉を口にしてはいけないと思いました。

安音のようないじめを受けてしまったら、だ

れだつて生きているのがつらくなるのだらう

と納得してしまいました。納得した自分も怖

かっただです。

しかし、それではいけない。まだ生きてい

られるのなら、しっかり生きなければいけません

ん。

私は、自分にできる事を考えました。安音のように誰かの心が一人ぼっちにならないようにするにはどうすればよいのか。

いくら考えても分かりませんでした。自分で自分を殺すってとても怖くて、それでもその方がいいと自殺を**選**ぼうとしている人を止めることができるといふ自信も、それをする勇氣も私にはありません。生きていられるのなら、生きていなければいけないとあれだけ

中学校専用原稿用紙

思ったのに何も思い付かない自分は口先だけでした。私は強くなりたいです。正しいことは正しい、まちがっているとはっきり言うことのできる人になって、口先だけではなくなつて、誰かを救うことができたらいいなと思います。今は、とても弱いけれど、せつたいに強くなります。

この本を読んで私は、誰かを守ることで生きるぐらい強くなることと、もう一つ決めたことがあります。それは、せつたいに自殺を

しないこと。自分の大切な人が苦しむのは、
ぜったいにいやだからです。もしかすると、
ただ自殺が怖いだけかもしれません。それで
もいい、どんなことがあっても自分で自分を
殺すのはダメだということはこの本から学び
ました。

一つの本によって、こんなに考えたのは初
めです。私がこの本を読んでたくさんのこ
とを感じたように、もっと多くの人がこの本
を開いてくれたらいいじめはぜったいに減ると

中学校専用原稿用紙

思います。そんな大きな力を持つた本に出会
えて幸せでした。

この世から、まだまだ生きられる命がきえ
てしまうことがなくなりますように。

指導者の言葉

本校では、平成 24 年度の生徒会によって自主策定された「いじめ撲滅宣言」の精神を受け継ぎ、いじめ撲滅に向け様々な活動を実施しています。例えば、「いじめ撲滅」啓発ビデオを制作し文化祭で上映したり、いじめ撲滅をテーマにした寸劇を披露したりしています。いじめのない学校を目指して日々取り組んでいます。

本作品は、いじめを苦に自殺を図る少女の苦悩と悲しみを描いた作品に触れ、自己の体験と重ねながら、自分の生き方を振り返り「生きること」の尊さや意味について深慮し、一つの結論に達した読書感想文です。読書感想文の書き方・構成等を学習した後、夏課題として読書感想文に取り組みました。

さまざまな悩みを抱えながら、「生きるとは」「命とは」など内省するこの時期に、死を描いた作品を読んで、生きることの難しさと大切さについての思いを、真摯に表現した作品になっています。